

---

# 短期留学プログラムによる 長期留学促進効果と阻害要因\*

茂木 良治

## 要 旨

本研究は、一ヶ月間の短期留学プログラム「フランス語実習」での経験がその後の長期留学にどのような影響を与えているのかを質的に調査したものである。「フランス語実習」に参加した学生のうち 23 名を研究協力者とし、今後の長期留学について半構造化インタビューを実施し、そのデータを質的研究手法 M-GTA により分析した。その結果、長期留学を希望する学生たちは短期留学を長期留学のための判断材料と見なし、短期留学の経験から新たな目標を設定し、長期留学の構想を練り始めていた。一方、経済的理由などで長期留学を断念した学生は、短期留学を最後の留学の機会とみなしていた。その他に、外国生活の不安が増して長期留学しないことを選ぶなど、短期留学から生じた阻害要因も明らかになった。これらの結果を「長期留学促進のプロセス」と「長期留学断念・短縮化のプロセス」としてモデル化した。

## 1. はじめに

社会のグローバル化が進展する中、人々の往来が盛んになり、日本人が国外で労働に従事するだけでなく、国内でも外国人労働者や観光客など異なる文化を背景とする人々と接する機会が増大している。このような人々と共生するためには、異文化理解を促進し、国際人としての素養を身につける機会をいかに提供できるかが重要となる。

政府は、2013 年（平成 25 年）に閣議決定された「日本再興戦略」<sup>1)</sup>や「第

二期教育振興基本計画<sup>2)</sup>において、2020年までに日本人の海外留学数を倍増させることを掲げ、能力・意欲のある若者に留学機会を付与することを決めた。そして、内閣官房主導で2014年（平成26年）に「若者の海外留学促進のための関係省庁等連絡会」が開かれ、若者の海外留学促進実行計画が発表された。留学を促進する施策として「トビタテ！留学JAPAN」<sup>3)</sup>が創設されたり、日本学生支援機構（JASSO）による海外留学支援制度など留学を希望する学生への支援制度が充実してきた。このような海外留学促進の強化方針は高等教育機関においても共有されており、大学にとっても、学生の海外留学をいかに促進するかは喫緊の課題となっている。

しかしながら、海外へ留学するという決断はそもそも大学生にとって容易なことではない。経済的負担、留学することで就職活動が遅延する可能性があること、慣れない外国で生活することへの不安、さらに、留学することで得られるメリットが見えにくかったりと留学するという決断に至るまでに超えなければならない障害がたくさんある。そのため、南山大学外国語学部フランス学科では、一ヶ月の短期留学プログラム「フランス語実習」を用意し、海外留学を体験することで、より長期の留学へと繋げることを目指している。

本研究では、フランス学科が用意している一ヶ月間の語学研修プログラムが、2セメスターあるいは1セメスターのより長期な留学を促進する要因となっているのか、あるいは阻害する要因となっているのか検討する。また、促進する場合、どのような面が影響しているのかについても検討する。

## 2. 長期留学を促進する短期留学の効果について

近年、国際社会で活躍できる人材の育成を目指して、大学では海外の大学と交換協定を結び、交換留学先を用意するなど、学生の留学を積極的に促進している。このような状況の中、留学を促進するために、近森（2006）では学生たちの留学に関する意識をアンケートにより調査している。その結果

から学生の留学志向を「積極派」「消極派」「浮動層」の3つに分類している。留学を経験してみたいと考えてはいるが留学に向けた情報収集など具体的な準備をしていないという「浮動層」が全体の半数を占めており、この「浮動層」に対する働きかけとして短期留学プログラムなどの制度の整備が効果的であろうと提案している。

佐藤（2014）では、海外短期留学に参加したことでのどのような教育効果があったか調査し、「海外短期派遣によって、国際的視野の拡大、異文化理解の深化、人的ネットワークの拡大（外国人の友人の増加）の効果が認められ、海外への心理的ハードルが下がり、海外での仕事や長期留学・インターンシップに関心を持ち始めた者も多い」（p. 71）と結論付けている。このように、短期留学での経験が長期留学への関心へと繋がる可能性を示している。

紫村（2015）は短期留学への参加が長期留学を促進するか調査し、短期派遣海外研修に参加した学生と不参加の学生とを比較している。その結果、長期留学への応募率、参加率ともに、短期研修に参加した学生が上回っていたことを示した。また、岩城（2012）は協定校が主催する短期プログラム（「おためし留学」）への派遣が、その後の交換留学への出発に効果的に働いていることを、アンケートを通して示した。特に、短期留学への参加が長期留学への意識をより高め、また、語学面や異文化適応面における不安の解消につながったとしている。

短期留学への参加が長期留学を促進することは上記の調査などから明確になっている。その一方で、短期留学が海外で生活することへの不安を解消したことを示唆しているものの、どのような経験がより長期の留学へと出発しようとする動機となるのかなどより深い調査がなされていない。また、短期留学に行ったが、長期留学へと出発しない場合の根拠などについても検討していくことも必要となるだろう。

本研究では、以上の先行研究の知見を参考にしながら、短期留学プログラムに参加した経験がどのように長期留学の出発に影響するのか、学生に対し

てインタビューを実施することで、より詳細に分析する。

### 3. 短期留学プログラム「フランス語実習」の概要

「フランス語実習」<sup>4)</sup>は、南山大学外国語学部フランス学科1年次向けの一ヶ月間（2月中旬～3月中旬）の短期留学プログラムである。参加者たちはオルレアン大学付属の語学学校 IDF（Institut de français）で本学向けに用意された約60時間のフランス語の授業を受ける。授業は、IDFの講師によりすべてフランス語で行われ、総合フランス語、発音、フランス文化、演劇や歌唱など実践に重きを置いたアトリエ授業で構成されている。学外活動としてオルレアン市街、ロワール河の古城、モンサンミッシェル・サンマロを訪れ、フランスの文化と歴史に触れる機会が用意されている。また、参加者は各々ホームステイをしており、フランス人家庭で約一ヶ月間生活をし、フランス語でのコミュニケーションを図る。

参加者は日中の語学学校のプログラムにおいては、基本的には本学の学生たちとともに行動しており、フランス語による授業を受けているものの、友人たちと日本語で話すことができる環境にある。一方で、各家庭に戻ると、ホストファミリーとフランス語だけの使用を強られる言語使用環境となる。このようなプログラム全体の特徴からも、参加者にとって留学における不安を比較的感じにくいものとなっている。

## 4. 方法

### 4.1. 研究協力者

本研究では、フランス語実習に参加した南山大学外国語学部フランス学科の2年次生を対象に、フランス語実習から帰国した3月末から2~4カ月後にインタビューを実施した<sup>5)</sup>。「フランス語実習」では、ホームステイの受

け入れ限度を考慮し、参加者は34名に制限してある。そのため、2015年は参加者が34名であった。それに対し、2016年に関しては前年に発生したパリ同時多発テロの影響で辞退者があり、最終的に25名の参加者となった。これら参加者の中で、留学に関するインタビューの要請に応じてくれた学生を研究協力者とした。2015年は34名の参加者に対し11名がインタビューに協力し、2016年は25名に対し12名であった。研究協力者には、インタビューを始める前に、研究の目的・倫理面の配慮について個別に説明し、承諾書により研究協力の了承を得た。

#### 4.2. 調査方法：半構造化インタビュー

2015年、2016年ともに調査者の研究室で1対1でインタビューを実施した。両年ともインタビューは半構造化形式で実施したが、質問項目などは必ずしも同じではない。インタビューの概要については、以下の表1でまとめた通りである。

表1：フランス語実習後に実施したインタビューの概要

	2015	2016
回答者数	11名	12名
インタビュー形式	半構造化	半構造化
中心的な質問項目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・短期留学の体験について</li> <li>・留学中の印象的な出来事について</li> <li>・授業について</li> <li>・ホームステイでの生活について</li> <li>・留学を通して後悔したこと</li> <li>・今後の留学について</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フランスのイメージの変化について</li> <li>・留学中にショックを感じたことについて</li> <li>・異なる言語環境について</li> <li>・留学を通じた自己成長について</li> <li>・帰国後の日本社会への適応について</li> <li>・今後の留学について</li> </ul>

表1に示したように、中心的な質問項目は異なるが、どちらのインタビューでも「今後の留学」について質問している。具体的には、「(フランス語実習)より長期の留学を今後するつもりはあるか」、「より長期の留学をする、もしくははしないという選択にフランス語実習の経験は影響しているか」というものである。本研究では、この「今後の留学」に関する質問のみ分析し、短期留学プログラム「フランス語実習」での経験が長期留学を検討するのにどのような影響を及ぼしているのか、あるいは、長期留学には行かないという判断にどのように影響しているのか、インタビューデータをもとに質的に分析する。

### 4.3. 分析方法とその手順

#### 4.3.1. 分析方法：M-GTA

録音したインタビューデータを書き起こし、研究協力者ごとに逐語録を作成した。分析方法として、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）(木下, 2003, 2007)を採用し、分析をおこなった。M-GTAとは、質的データの解釈から説明力のある概念を生成し、概念間の関連性を高め、まとまりのある理論を生成する手法である。この生成した理論は、その人間行動を説明するモデルであるだけでなく、同じような状況下にある人間行動を予測するのに役立つため、介護や教育などの実践的な領域に貢献する可能性がある調査手法である。

M-GTAでは、データに密着した分析（grounded-on-data）をおこなうため、データから離れすぎず適切な距離をとるために分析テーマを設定する。また、分析結果の適応可能範囲を明確にするために分析焦点者を設定する。本研究では、分析テーマを「短期留学での経験が長期留学にどのような影響を及ぼしているか」とし、分析焦点者を「フランスへの短期留学をした大学生」とした。

#### 4.3.2. 分析手順

M-GTA では、独自の分析ワークシート（資料1）を利用しながら、研究者自身がインタビューデータを書き起こし、そのデータを繰り返し丹念に読み取り概念の生成を試みる。分析ワークシートは、1つの概念につき1枚用意する。「分析ワークシート」は、「概念名」「定義」「ヴァリエーション」「理論的メモ」の4つの項目で構成されており、データの中で概念に関係が深い具体的な記述を抽出し、「ヴァリエーション」の欄に書き留めていく。その後、他のデータも読み取り、類似した事例などを見つけた場合、その都度そのシートに事例を書き留め、集めていく。事例が複数集まったら、その事例を明確に説明するような「概念名」を命名し、その「定義」を決めていく。また、この分析プロセスにおける研究者の考察などを「理論的メモ」の欄に書き留め、概念を統合する際やその後のカテゴリーの生成の際に活用する。

本研究では、まずインタビューの逐語録の中で、比較的豊富な内容を含んでいる1つのデータから分析を開始した。分析テーマ「短期留学での経験が長期留学にどのような影響を及ぼしているか」に着目しながら、このテーマに関係が深い事例を概念候補として抽出した。生成した概念の一例を以下に示す。インタビューデータの中に、「勉強だけでなく自分自身も成長できるから、留学って大事だよなというのは考えていました。」「親元を離れて、一人で生きていくというか。人に頼りすぎずに解決するために、留学した方がいいかなって思いました。」「新しい土地に行っても自分で生活できるようになっていきたいなって思って。」というような事例が見られ、これらの事例を説明する概念を生成し、〈成長の場としての留学〉と命名した。そして、この概念を「留学することで個人の成長が期待できるという考え」と定義した。

データを読み取りながら、このように概念生成を行う。必要に応じて近い2つの概念を1つに統合したり、1つの概念を2つに分けたりなど、研究者の視点に基づいて分析を実施する。データから新たな概念が生成できなくなるまでこの作業を繰り返していく。概念の生成が終わると、概念間の関係が

ら上位概念であるカテゴリーを生成する。さらに、カテゴリー間を関係づけて、現象全体を説明する結果図を作成する。最後に、結果図に沿って、抽出した概念やカテゴリーを用いてストーリーラインを作成し、言葉により現象を説明する。M-GTAに基づいてモデルを構築することで、現象のプロセスを明示することが可能となるだけでなく、今後の実践に応用することも可能となる。

## 5. 結果

上記の分析手順で概念生成および概念を包括するカテゴリー生成をおこなった結果、7カテゴリー、22概念が生成された(表2)。概念間の関係性を検討し、関係図を作成した(5.1. 参照)。この関係図に基づくストーリーラインを5.2. で述べる。さらに、5.3. では「長期留学促進のプロセス」と「長期留学断念・短縮化のプロセス」について研究協力者の発言を引用しながら詳しく検討する。

表2：概念とその定義一覧

カテゴリー	概念	定義
長期留学志向	大学入学時からの長期留学願望	大学入学で外国語学部に入ったことで、長期留学をしたいという願望
調整困難な長期留学の障害	高度な語学力が必須ではない社会	就職など社会に出る際に必ずしも高度な語学力が必要ではないと考えている様子
	留学にかかる経済的コスト	留学するために必要な経済的コストがかかるため、長期の留学が期待できない状態
	社会情勢の変化による不安	治安悪化や、社会情勢の変化で長期の外国滞在を不安視する態度
短期留学の位置付け	長期留学の判断材料としての短期留学	長期留学に行くことを検討していて、短期留学に長期留学の下見のような形で参加していること
	最後の機会としての短期留学	長期留学に行くことは考えておらず、学生時代最後の留学として短期留学に参加すること



短期留学プログラムによる長期留学促進効果と阻害要因

フランス滞在中の感情の変化	フランス滞在の楽しさ	フランス滞在が楽しく、高い満足度だった様子
	フランス語が上達した実感	フランス語が理解できて、通じたと実感できたこと
	うまく話せなかったという後悔	短期留学においてうまくフランス語で表現できなかったという後悔の念
長期留学に向けた新たな目標	留学先で出会った人々ともっと仲を深めたいという思い	短期留学で出会った人々ともっと仲を深めたいという思いから、新たな目標を立てていること
	成長の場としての留学	留学することで個人の成長が期待できるという考え
	語学力が伸びる期待	短期留学では期間が短かったが、長期間留学することでより語学力が伸びるのではないかと期待
長期留学の構想	不十分な留学期間の短期留学	一ヶ月という短期留学の留学期間では不十分であるという考え
	短期留学先とは他の街への興味	短期留学で滞在した街（オルレアン）以外の街に興味を持ち、滞在したいという希望
	長期留学の滞在形態の模索	短期留学で体験したホームステイであったり、それとは異なる滞在形態を検討している様子
	英語を学ぶことができる留学先	社会的なニーズの高い英語を学ぶことができる留学先を探している様子
短期留学から生じた阻害要因	短期留学の充足感	短期留学で自分のやりたいことをやり切ったと感じている様子
	外国生活の不安	外国で一人で生活することに対する不安
	フランス語での生活・授業への疲弊感	短期留学に経験したフランス語での生活や授業に対して疲弊感を感じている様子
	日本で力をつけることの必要性	短期留学を通して、日本でもっと力を付ける必要があると感じたこと
	日本でしかできないこと	サークルなど日本でしかできない活動や日本が恋しくなるため、長期間の留学ができないのではないかと悩む
	就職活動のプレッシャー	4年での卒業を意識し、就職活動のタイミングや就職活動の準備を気にしている様子

### 5.1. 関係図

その後、これらのカテゴリと概念の関係を示す関係図を作成した(図1)。以下に、その関係図を示す(図内の【 】はカテゴリ、〈 〉は概念、➡は影響の方向、⇒は変化の方向を表す)。

【○○】: カテゴリ    <○○> : 概念    ➡ : 影響の方向    ⇒ : 変化の方向

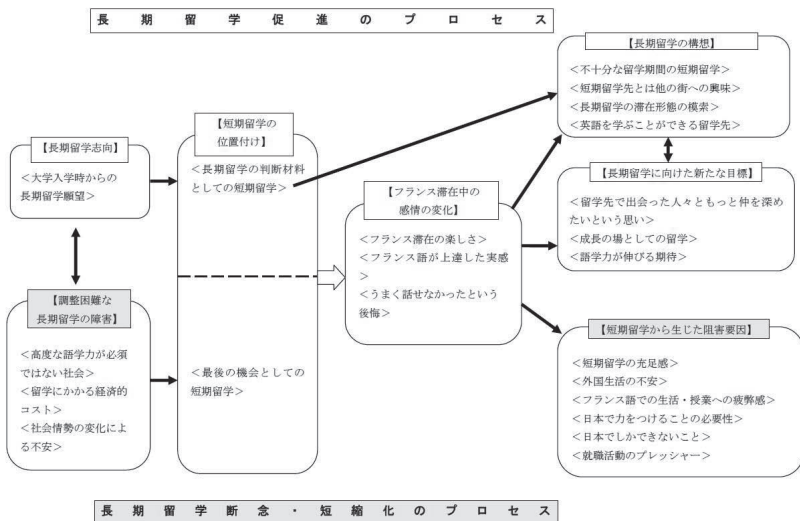


図1: 長期留学への影響を示す関係図

### 5.2. ストーリーライン

上記の関係図をストーリーラインで説明していく(【 】はカテゴリ、〈 〉は概念を表す)。

フランス学科の学生は、〈大学入学時から長期留学願望〉をもっている【長期留学志向】の学生が多い。彼らの多くは長期留学を希望する一方で、長期留学するためには、〈高度な語学力が必須ではない社会〉・〈留学にかかる経済的コスト〉・〈社会情勢の変化による不安〉などの【調整困難な長期留学の

【障害】を乗り越える必要がある。【長期留学志向】の学生は、〈長期留学の判断材料として短期留学〉を捉えているのに対し、【調整困難な長期留学の障害】に直面した学生は、〈最後の機会として短期留学〉を位置付けており、【短期留学の位置付け】が大きく異なる。

学生たちは一ヶ月の短期留学において、〈フランス滞在の楽しさ〉を見出している。その中で、〈フランス語が上達した実感〉を得ている一方で、フランス語話者と〈うまく話せなかったという後悔〉の念を抱き、相反する感情の中で葛藤している。このように【フランス滞在中の感情の変化】に学生たちは気づいている。

これらの【フランス滞在中の感情の変化】から、〈留学先で出会った人々ともっと仲を深めたいという思い〉を抱いたり、留学期間が延びることで〈語学力が伸びる期待〉を膨らませたり、個人の〈成長の場としての留学〉を検討したりと、【長期留学に向けた新たな目標】を設定している。

また、〈長期留学の判断材料として短期留学〉に参加した【長期留学志向】の学生たちは、語学力や海外生活に慣れるためには、一ヶ月という〈不十分な留学期間の短期留学〉ではなく、より長い期間海外で学ぶ【長期留学の構想】を練り始めている。短期留学の滞在先であるオルレアンや、滞在形態であるホームステイを比較対象とし、〈短期留学先とは他の街への興味〉を抱き、〈長期留学の滞在形態の模索〉を開始している。一部の学生ではあるが、英語の社会的ニーズの高さからフランス語だけではなく〈英語を学ぶことができる留学先〉を検討している。

このように短期留学での経験が【長期留学に向けた新たな目標】の設定や【長期留学の構想】に寄与している一方で、短期留学を経験したことで多様な【短期留学から生じた阻害要因】も現れる。学生たちは、一ヶ月間の〈短期留学の充足感〉からこれ以上留学に関心を示さなかったり、短期留学中に感じた〈外国生活の不安〉や〈フランス語での生活・授業への疲弊感〉から留学を目指すことを止めたりする。また、フランス語でのやり取りがうまく

いかず、留学して現地に飛びこむよりも〈日本で力をつけることの必要性〉を感じ、長期留学に消極的になる学生もいる。一ヶ月間海外で生活をしたことで、〈日本でしかできないこと〉を再認識したり、日本を長期間離れることで生じるであろう〈就職活動のプレッシャー〉から留学期間を短縮したり、長期留学を諦める学生もいる。

### 5.3. 短期留学が長期留学に与える影響について

#### 5.3.1. 長期留学促進のプロセス

長期留学に出発するという選択をする学生は、関係図上部の「長期留学促進のプロセス」に沿っている。フランス学科に入学する学生は、〈大学入学時から長期留学願望〉をもっている【長期留学志向】の学生が多い。例えば、「もともと大学入った時から行きたかったんですけど、よりもっとフランス語勉強したいなって一ヶ月行ってより思うようになりました。より強く。」(Etu1509)<sup>6)</sup>と述べているように、入学時からの長期留学を視野に入れていることがわかる。また、「もうちょっと長い留学を考えているんですけど、いきなり一人で長期間行くってなると、ちょっと不安があったので、なんか、その一友達もいるし、期間も一ヶ月だしていうので、いいなって思った。」(Etu1510)とあるように、長期留学を希望していたが、海外での生活に不安を抱えていたため、その不安を払しょくしようと短期留学プログラムへの参加を決めている。短期留学プログラムは同級生とともに留学することや、一ヶ月という短い期間のため、学生たちにとっては比較的気軽に参加できるものであった。他にも、「(長期留学に)行けたらいいくらいで。でも、なんか行くかどうかはフランス語実習に行ってから決めようと思っていて。」(Etu1609)とある。このように〈長期留学の判断材料として短期留学〉は見なされていた。

フランス語実習において、学生たちは大学でフランス語を学びながら、フランス人家庭でホームステイをした。その他に、学外活動としてロワール河

の古城、モンサンミッシェル・サンマロを訪れたり、週末はパリやオルレ안의市街地でショッピングや観光を楽しんだりしていた。そのため、学生たちは、〈フランス滞在の楽しさ〉を見出していた。また、「フランス語も勉強できてとか、やっぱりどんどん聞いていて、理解できるようになるのがうれしかったです。何回かあって。」(Etu1507)と述べているように、学生たちはフランス人ホストファミリーとのフランス語での会話の中で、〈フランス語が上達した実感〉を得ている。その一方で、フランス語話者と〈うまく話せなかったという後悔〉の念を抱いていた。例えば、「伝えたいことが十分に伝えられなかったというのが主にあって、やっぱそういうのをやっぱり自分の伝えたいことを100%くらい、100%近くちゃんと自分の意志を伝えられるようになりたい。」(Etu1609)と述べているように、うまく伝えられないもどかしさを感じる機会となった。

これらの経験は、【長期留学に向けた新たな目標】の設定へとつながっている。〈留学先で出会った人々ともっと仲を深めたいという思い〉をもち、「ホストファミリーともっとしゃべりたいというのが大きいから、一年行ってそこでもっと仲を深めたい。(中略)週末とか一緒に過ごせたらいいなど。」(Etu1503)と述べているように、長期留学した時の自身の希望を述べている。長期の留学に行くことで、〈語学力が伸びる期待〉について語っている学生もいる。「なんか、結局、あんまりコミュニケーション得意じゃないんで、行ってもすぐにできなかったとかするんですけど。(半年行けば)もうちょっとなんかできるかなって」(Etu1507)。また、「フランス語実習」は大学が提供した短期留学プログラムであったため、学生たちは守られていたという認識があったようだ。個人の〈成長の場としての留学〉を今後の目標とする学生たちがいた。現地地で病気にかかるというハプニングに遭い、周囲に助けられたEtu1604は、「ハプニングがおきた時に、どうしても自分だけでその時は解決できなくて、学校の人とかAさんとかに頼ってしまったんですけど。それじゃ、せっかく大学でフランス語を学んでいるのに、自分で結局解決で

きないままだったので。そういう予期していないことがおきても、自分でフランス語で解決できるようになりたいと思いました。」(Etu1604)と述べている。その他にも、「フランス実習は一ヶ月だったけど、もっと長く生活していたら、もっと大変なことも出てくると思うし、今回は日本人みんな一緒にいたから結構困ったことあったら、友達に聞いてたりしていたけど、一人で留学いったら全部フランス語とかでやり取りしないとイケないから、そういうのもちゃんとできるようになりたいなって思います。(中略)新しい土地に行っても自分で生活できるようになっていきたいなって思っ。」(Etu1608)とあるように、長期留学を自立の機会と見なしている。

【長期留学志向】の学生たちは、短期留学での滞在を比較対象としながら、【長期留学の構想】を練っている。長期の留学を希望する学生にとっては、一ヶ月の短期留学では〈不十分な留学期間〉であり、より長い滞在を検討している。また、「はじめての海外だったので、こんな感じなんだったら、オルレアンじゃないところも行ってみたいな。」(Etu1612)と述べているように、〈短期留学先とは他の街への興味〉を抱いている。また、長期の滞在场の場合、フランス語実習と同じようにホームステイにするか、ホームステイ以外の学生寮や一人暮らしなど他の滞在形態にするか〈長期留学の滞在形態の模索〉を始めている。また、一ヶ月のフランス留学を経験し、より長期の留学を英語圏で検討する学生や、「英語とフランス語両方できるとがいい。(中略)その、もともとすごい英語好きで、得意だけど、フランス行ったら、英語しゃべれなくなっちゃったから。本当に一ヶ月だけで。長期留学の時に、これ以上英語が話せなくなったらやばいなって、英語あってのフランス語だと思っから。」(Etu1504)と述べているように、フランス語だけではなく、英語も同時に学べる留学先を検討する学生もいた。

### 5.3.2. 長期留学断念・短縮化のプロセス

短期留学プログラムに参加した学生には、学生生活で〈最後の留学の機会〉として短期留学に臨むものもいた。「自分が、将来、語学使った職につくか

どうかはわからなくて、多分つかない。そんなに語学を武器にしてお仕事をしたいと思えなくて。」(Etu1505)と述べているように、〈高度な語学力が必須ではない社会〉を意識しており、長期留学までして語学を磨くことをそもそも求めていない。その他に、「わたし親や家族とか、金銭問題、経済的な問題とか、その……留年できないみたいな。留年はできないから、あんまり留学は行けないかもみたいな言われていたから」(Etu1505)と述べているように、〈留学にかかる経済的コスト〉から親に長期の留学は止められている場合もある。さらに、2015年ごろはフランス国内やヨーロッパでテロ事件が多数発生していたこともあり、「いまちょっとヨーロッパがちょっと怖いので、微妙だなと思っていて、で、せっかく南山に来たので、留学したいなと思うんですけど、現実的に考えるとちょっと厳しいかなと思っていて。」(Etu1606)と吐露しているように、〈社会情勢の変化による不安〉から一人で長期間フランスに滞在することを諦めている。これらの【調整困難な長期留学の障害】に直面した場合、学生自身で解決することは困難であり、短期留学に参加する以前から長期留学を断念しているような状況といえる。むしろ、短期留学プログラムを〈最後の留学の機会〉と見なし、充実した一ヶ月のフランス滞在を送っていた。

一方で、長期留学を漠然と検討していた学生が短期留学を経験したことで取りやめたり、長期留学をするが、滞在期間を短縮するような動きが見られた。一ヶ月のフランス滞在を楽しく過ごし、〈短期留学の充足感〉を得ているにも関わらず、長期留学を希望しない学生が数名いた。例えば、「今回、すごく楽しかったから。次の留学でがっかりしたくない。私の周りにいたフランス人がみんなけっこうフレンドリーで、いい人だったんですよ。フランス人っていい人っていう概念があるから、その概念を壊したくない。」(Etu1610)と述べているように、次の留学のステップへと進むのではなく、留学しないことを選んでいる。一ヶ月ではあるがフランス生活を経験して、〈外国生活の不安〉を吐露した学生もいる。「ん〜一人で海外、誰も知らない

ところに行くのはちょっと、今回は友達とか、日本人がいたからいいけど。一人で行くのはな～ちょっと。」(Etu1610) というように、短期留学プログラムは集団で参加したことにより安心であったが、一人で海外に行く自信がなくなっている。その他にも、「大学の授業が大変だったというのものもあるんですけど。(中略) ちょっと。ずっとなんか頭使っている感じがずっとして、身につくのはわかるけど、あれをもう一回やれて言われたら、どうしよう。(中略) なんか疲れます。」(Etu1505) というように、〈フランス語での生活・授業への疲弊感〉を感じ、この学生は長期留学を希望していない。

フランス語話者と〈うまく話せなかったという後悔〉から、次の留学に向かうのではなく、むしろ〈日本で力をつけることの必要性〉を痛感した学生もいる。Etu1511 は、「やっぱりもう一度留学するのであれば、前回から少しでも自分が成長した状態で行きたいなっていうのがあって、おんなじ状態で行っても、やっぱり得られるものはあると思うんですけど、それでも一回行った経験をもっと活かすためには、そこですごく感じた自分の力不足というのをちゃんと日本でなるべく力をつけて、そこでの不安な部分をなるべく消してから行きたいなというのがあった」(Etu1511) と述べ、積極的に長期留学へ向けた準備を始めることができていない。また、一ヶ月日本を離れる経験をし、Etu1506 が「私は今は(次の留学を)半年で考えています。(中略) 1年いいなとは思ったんですけど、一ヶ月行って、途中ですごい日本が恋しくなくなっちゃって。(中略) 楽しかったんですけど。日本食とかが特に恋しくなっちゃうんですよ。ごはんとかが。」と述べているように、日本が恋しくなる経験をして留学期間の短縮を検討している。その他にもサークル活動や部活動など〈日本でしかできないこと〉を優先し、留学を断念することもある。さらに、3年次の9月から1年間留学した場合、就職活動に影響することを懸念している。「1年行くと就活できないからどうしようみたいな。」(Etu1501) と述べているように、就職活動開始の時期に合わせて帰国できるように、1セメスターの留学を選択するケースが見られる。



## 6. 考察

以上のように、本研究では留学に関するインタビューデータを、M-GTAを用いて分析し、短期留学プログラム「フランス語実習」への参加が、どのように長期留学へと繋がっていくのか、あるいは、長期留学に行かない（もしくは留学期間を短縮する）という選択に繋がっていくのかそのプロセスを示した。

このプロセスを示したことで、先行研究では扱われてこなかった短期留学の経験と長期留学を繋げるきっかけや、短期留学の経験が長期留学の弊害となる点があることを明らかにすることに成功した。短期留学の経験と長期留学を繋げるきっかけは、【フランス滞在中の感情の変化】（〈フランス滞在中の楽しさ〉〈フランス語が上達した実感〉〈うまく話せなかったという後悔〉）であり、これが【長期留学に向けた新たな目標】の設定へと繋がっていく。学生たちは明確な目標を立てることができたことで、長期留学に向けて具体的な準備を進めていくことになる。一方で、短期留学への経験が長期留学の弊害となる点については、【短期留学で生じた阻害要因】として示した。短期留学プログラムが常に長期留学を促進するというにはならないことを示している。また、学生自身が解決することが困難な【調整困難な長期留学の障害】とは異なり、【短期留学で生じた阻害要因】に挙げられている概念（〈短期留学の充足感〉〈外国生活の不安〉〈フランス語での生活・授業への疲弊感〉〈日本で力をつけることの必要性〉〈日本でしかできないこと〉〈就職活動のプレッシャー〉）は学生たちの内向き志向と関係が深いように思える。

次に、今回の調査でインタビューに回答した研究協力者（2015年11名、2016年12名）が、その後在学中に長期留学へと出発したか、そして長期留学した場合、フランス語圏あるいはそれ以外の地域へと、2セメスターもしくは1セメスター留学したか数値で示し（表3）、数量的な面から短期留学と長期留学の繋がりを考察する。

表3：研究協力者の長期留学者数

	仏語圏 2学期間	仏語圏 1学期間	仏語圏外 2学期間	仏語圏外 1学期間	長期留学 なし
2015年 11名	2名 (18%)	7名 (64%)	0 (0%)	0 (0%)	2名 (18%)
2016年 12名	5名 (41%)	2名 (17%)	0 (0%)	0 (0%)	5名 (41%)

表3が示す通り、2015年に関しては11名中9名（82%）が、2016年に関しては12名中7名（58%）が長期の留学へと出発しており、半数以上の学生に相当する。これらの数量的結果は、短期留学プログラム「フランス語実習」がその後の長期留学へと繋がっていることを示唆しており、本調査で示した「長期留学促進のプロセス」に沿って長期留学を実行したことになる。一方で、2015年2名（18%）、2016年5名（41%）が長期留学をしなかった。この長期留学しなかった学生たちは、「長期留学断念・短縮化のプロセス」に沿ったことになる。今回はデータ分析に多くの時間を要したため叶わなかったが、彼らが長期留学をしなかった根拠が【調整困難な長期留学の障害】によるものなのか、あるいは【短期留学で生じた阻害要因】によって長期留学を検討することを止めてしまったのか見極め、後者であれば必要に応じて適切な介入をし、長期留学へと導くことも可能であったかもしれない。

最後に、本研究では研究手法としてM-GTAを採用し、モデルを構築したことで、「長期留学促進のプロセス」および「長期留学断念・短縮化のプロセス」を明示することができた。このモデルは実践へと応用可能であり、今後、短期語学留学に参加した学生が長期留学をするのかという行動を予測することも可能となる。また、長期留学をしようか躊躇している学生に対して、どのような点が問題で躊躇しているのかなど予測し、教師や留学経験者の先輩などが適切な介入をすることで、長期留学を後押しすることも可能となるだろう。

## 7. おわりに

本研究では、分析焦点者を「フランスへの短期留学をした大学生」と設定し、分析テーマである「短期留学での経験が長期留学にどのような影響を及ぼしているか」に着目しながらインタビューデータを分析し、短期留学プログラムによる長期留学促進効果と阻害要因に関するモデルを構築した。フランス語に限らず外国語を集中的に学んでいる学科に所属する大学生のように、今回の分析焦点者と類似した属性をもつものであれば、本研究で構築したモデルが適応でき、予測に役立つ可能性がある。

今後の課題としては、【短期留学で生じた阻害要因】によって長期留学をすることに躊躇していたり、諦めそうになっている学生に対して、どのような介入を施せば、長期留学へと導くことができるのか検討することが必要になる。例えば、短期留学のプログラムを変更する必要があるのか、あるいは短期留学帰国後に教師や留学経験のある先輩などの留学体験談など情報を提供することを通して、長期留学することを阻害している要因を取り除くための支援体制について検討していく必要があるだろう。

## 注

\*本研究は、2016年度南山大学パッへ研究奨励金 I-A-2 の助成による研究成果の一部である。

- 1) [http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisci/pdf/saikou\\_jpn.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisci/pdf/saikou_jpn.pdf)
- 2) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/keikaku/detail/\\_\\_\\_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/___icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf)
- 3) <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku>
- 4) 2004年度から2016年度まで「フランス語実習」という名称で実施していたが、2017年度以降は「海外フィールドワーク（フランス）」という名称に変更し、2年次の6~7月の時期に同様の短期留学プログラムを展開している。
- 5) 2015年のインタビューは2015年5月~6月の間に、2016年のインタビュー

は2016年6月～7月の間に実施した。

- 6) 研究協力者にはEtu1509のようにそれぞれ番号を付した。Etuは「学生」を意味し、15/16は「短期留学した年」を示し、最後の二桁は通し番号である。引用後の番号は発話をした当該研究協力者を示す。

## 参考文献

- 岩城奈巳 (2012)「留学推進の取り組みが交換留学に与える影響についての実態調査」『名古屋大学留学生センター紀要』, 10, pp.23-29.
- 木下康仁 (2003).『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』, 弘文堂: 東京.
- 木下康仁 (2007).『ライブ講義 M-GTA』, 弘文堂: 東京.
- 佐藤由利子 (2014)「海外短期派遣を通じた日本人学生のグローバル化効果と実施上の課題—国際環境事例研究に参加した大学院生及び指導教員の調査結果から—」, 『広島大学国際センター紀要』, 第4号, pp.57-73.
- 紫村次宏 (2015)「短期海外派遣プログラムの長期留学への効果」『日本教育工学会第31回大会予稿集』, pp.443-444.
- 近森高明 (2006)「留学志向の三層と留学支援のありかた—積極派・消極派・浮動層のプロフィールをてがかりに—」『京都大学における国際交流の現状と可能性—第2回アンケート調査報告書』京都大学国際交流センター, pp.43-54.

## 資料 1

概念名 11	成長の場としての留学
定義	留学することで個人の成長が期待できるという考え
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <u>勉強だけでなく自分自身も成長できるから、留学って大事だよな</u>というの<span style="float: right;">(Etu1505)</span></li> <li>• <u>ハプニングがおきた時に、どうしても自分だけでその時は解決できなくて、学校の人とか A さんとかに頼ってしまったんですけど。それじゃ、せっかく大学でフランス語を学んでいるのに、自分で結局解決できないままだったので。そういう予期していないことがおきても、自分でフランス語で解決できるようになりたいと思いました。</u><span style="float: right;">(Etu1604)</span></li> <li>• <u>フランス語ももうすこしもっと頑張らないといけないし。親元を離れて、一人で生きていくというか。人に頼りすぎずに解決するために、留学した方がいいかなって思いました。</u><span style="float: right;">(Etu1604)</span></li> <li>• <u>フランス実習は一ヶ月だったけど、もっと長く生活していたら、もっと大変なことも出てくると思うし、今回は日本人みんな一緒にいたから結構困ったことあったら、友達に聞いてたりしていたけど、一人で留学いったら全部フランス語とかでやり取りしないと<span style="float: right;">いけないから、そういうのもちゃんとできるようになりたいなって思います。</span></u><span style="float: right;">(中略) 新しい土地に行っても自分で生活できるようになっていきたいなって思って。</span><span style="float: right;">(Etu1608)</span></li> <li>• <u>なん行って、楽しいだけで帰ってきたので、一回日本に帰りたくなるくらい海外に行きたいなって思っ</u><span style="float: right;">て。</span><span style="float: right;">(Etu1612)</span></li> </ul>
理論的メモ	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 短期留学では友達であったり、先生などがおり、学校のプログラムであったが、一人で計画し、生活する長期留学を成長の場としてとらえており、「新たな目標」という意味合いが強い。</li> </ul>